

③ 言葉・作品から探ろう！

高田は作品制作を通して思索する中でいくつかの言葉を残しています。そのひとつをピックアップして紹介！彼の作品制作の姿勢に触れてみよう。

高田はたくさんの人の肖像彫刻をつくった。
しかし、見た人からは「似ていない」と度々言われたそうだ。
肖像を依頼した本人が気に入らず、突き返されたこともある。
そこで高田は言った。

“ 人間の顔の表面は年とともに変わるが、
一生のものは変わらない。
本当をいうと、現在のあなたが私の作った像に
似てこないといけないのだ。 ”



⑤ この言葉には、高田の作品制作に対するどのような思いが込められているのだろうか？

⑥ 高田博厚の目に映るものをいろんな視点から探ってきたね。高田は、生涯をかけて何を探った人だろうか？

キャッチフレーズ 高田博厚は…

ひと言で言うと
どんな人？



を探り続けた人！

福井市美術館にある主な肖像



岩波茂雄(いわなみしげお)



梅原龍三郎(うめはらりゅうざぶろう)



萩原朔太郎(はぎわらさくたろう)



佐藤春夫(さとうはるお)



室町澄子(むろまちすみこ)



西田幾多郎(にしだきたろう)



マルセル・マルチネ



ポール・シニャック



イザベル・ルオー



ジャン・コクトー

福井県にゆかりのある彫刻家
高田博厚の
えらべる
鑑賞シート



名前

日にち 月 日()

高田博厚の目に
映るものを探ろう



高田博厚
と福井

高田博厚(1900-1987)は、人物彫刻を数多く残した彫刻家です。それだけではなく、文筆家、思想家としても活躍しました。そんな彼の人格形成に大きく影響したのが、2歳から18歳までの福井での生活。彼はこの地で、精神の土台を作り上げたのです。また、30歳で渡仏し、57歳で帰国した後は、展覧会や講演会活動を通して福井の文化向上に貢献したという点でも、福井とゆかりがあります。

目に映るものは…

高田は交流のあった人物だけでなく、実際には顔を合わせたことのない人物も制作しました。高田が人物彫刻に込める思いとは、一体何だったのでしょうか。また、それを表すに至るまでの長い年月の中で、何を見てきたのでしょうか。三つの視点から高田の生涯を紐解き、彼の目に映るものを探っていきましょう。



「カテドラル」セメント・1937年 「遠望(えんぼう)」ブロンズ・1981年

このワークシートの
つかいかた



資料コーナー
ページ上部は、高田博厚の青少年時代、交友、言葉・作品の三つの視点から、彼の生き方を探っていきます。高田の人生を、ワクワクしながらたどってみよう。

考えるコーナー
ページ下部は、高田博厚の人生や思想について考えるコーナーです。上部の資料を見て、あなたなりに想像をふくらませてみよう！そこから、高田の目に映るものを探っていく。

① 福井での青少年時代から探ろう!



青少年高田博厚が愛した蔵書の一部を大公開!

宗教書 「新旧約聖書」

キリスト教徒によって書かれた、キリスト教の聖典。預言者であるイエス・キリストの生涯と言葉（福音と呼ばれる）、初代教会の歴史、初代教会の指導者達によって書かれた書簡からなる。

●有名な言葉…「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。」

物語 「ジャン・クリストフ」(著:ロマン・ロラン)

ロラン自身の免罪性や情実に満ちた社会への批判が籠められた長編小説。

●あらすじ…主人公のジャン・クリストフは宮廷音楽家の父のもとに生まれ、様々な出会いを経験し、時には極度に嗜みながら、クリストフは作曲家として大成していく。その中で音楽界における党派の横行、音楽家と批評家の裏取引などに彼は厳しい批判を浴びせる。

●他には… 源氏物語 / 西遊記 / 平家物語 / 東海道中膝栗毛 / 夏目漱石 / 島崎藤村 / ゲーテ / ドストエフスキー

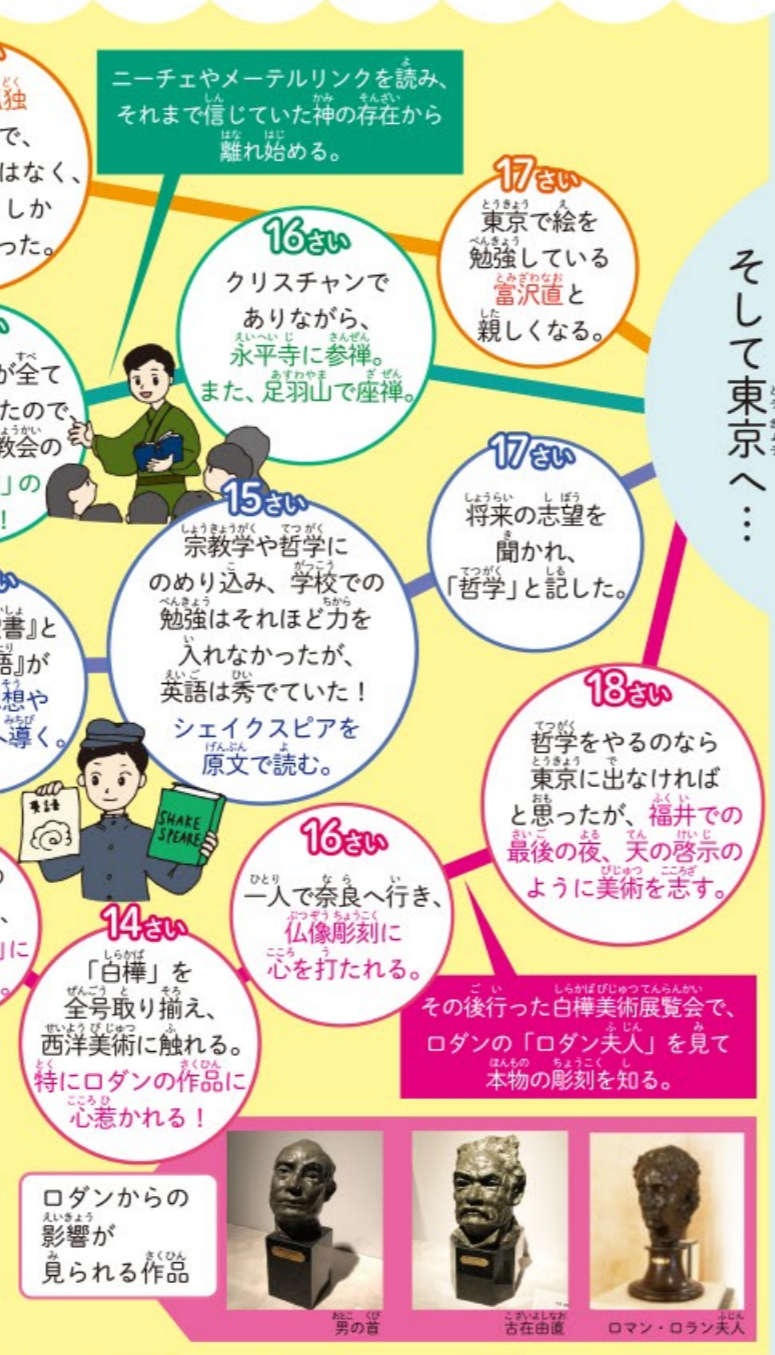
宗教書 「悦ばしき知識」(著:フリードリヒ・ニーチェ)

ドイツの哲学者ニーチェによる詩唱群。「神は死んだ」や「超人」といった概念が登場する。彼はキリスト教に対して否定的な考え方を持っていた。

●ニヒリズム(虚無主義)とは?…物事や人間の存在には意義・目的・真理・本質的価値などが無いとする考え方。ニーチェは、その考え方を克服し、一瞬一瞬を懸命に生きて自らを創造的に展開できる「超人」になることをすすめた。

●他には… キルケゴール / スピノザ

② 交友から探ろう!



① 高田は青少年時代、どんなことに興味があったのだろう?

② 青少年時代の経験は、高田をどんな人間にしたのだろう?

③ 交友から探ろう!



③ 高田はどんな人と出会い、どんなことを語り合い、どんな時間を過ごしたのだろう?

④ 高田にとって、様々な方面で活躍する知識人と交流することはどのような意味があったのだろう?

④ フランス

24歳 大塚の家族で住む家に、片山敏彦が来訪。西荻窪にアトリエを建てる。

25歳 高村、高橋元吉、長尾宏也、松田利勝らと共に産村「赤い家」を下高井戸に建てる。

26歳 シャルル・ヴィルドラックが来日し、ロマン・ロランに傾倒する者同士で親しく会う。

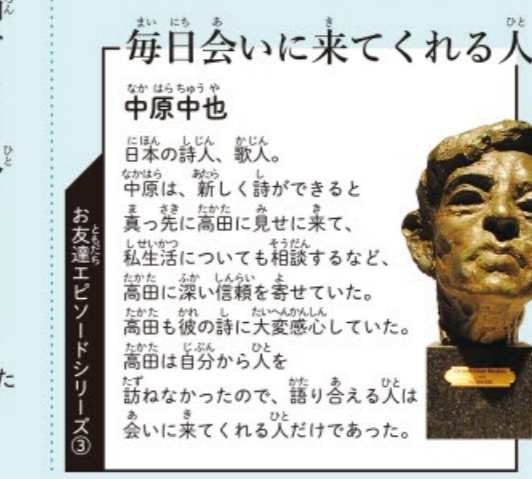
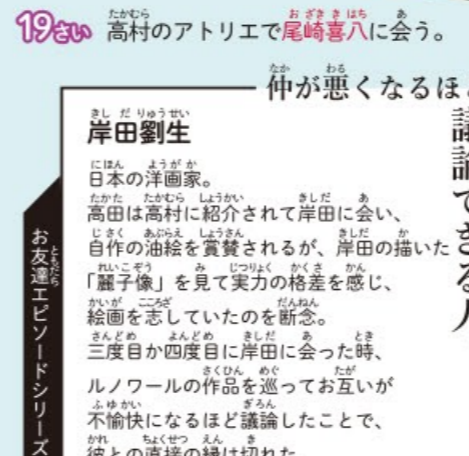
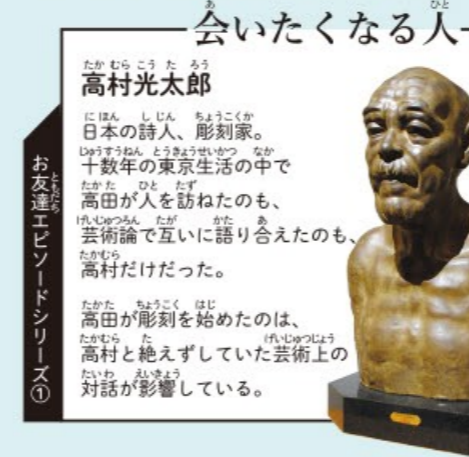
28歳 片山敏彦に連れられ、谷川徹三がアトリエ来訪。谷川は古谷綱武、古谷は中原中也、小林秀雄、大岡昇平らと高田のアトリエは、理想に燃え、未来を語り合う若者たちのたまり場となっていた。

31歳 現地いた片山敏彦により、フランスの知識層の中に導かれる。スイスにロマン・ロランを訪ね、彼の家に滞在していたマハトマ・ガンジーを素描。

32歳 アランを訪ね、彼の像を作る。ロランとその夫人の像を作る。この頃一番貧乏な時代だったが、仕事は一番おこなった。

33歳 20年前に投身自殺した詩人レオン・ドゥーベルの像や当時パリに来ていた友人たちの肖像を作る。

36歳 武者小路実篤を伴い、ピカソとジョルジュ・ルオーを訪ねる。



一生 信頼と尊敬を寄せた

ロマン・ロラン

フランスの作家、思想家。高田は少年時代からロランの著書を読み、彼を唯一の「師」と呼んだ。彼も高田の作品に感銘を受けており、高田の制作に協力する姿勢を見せつけている。(彼はこれまで誰の肖像の依頼も拒絶してきた。)

「高田は、単に外形だけを形作るのではなく、形にしろしづけられている精神をも形作る本当の芸術家です。」

